

## 用語について (1)

山口青邨

まづ文語體と口語體といふことに就て述べて見たい。

今、座右の俳誌を見るに大抵の俳句作品は文語體である、口語體のは稀である。文語體のもつ骨格が、しっかりしてゐて、格調が高いといふことや、短い言葉で済むので、短い詩に豊かな内容を盛るのに都合がよい、口語體だとしても長くなるし、句品が落ちる、それに今までの人は文語體に慣れてゐて、自由に驅使出来る——さういふことであらう。

この頃、若い人達の間には俳句は口語體にしたいと主張するグループがある、これも一つの傾向と見ることが出来る。

私は原則として文語體を使つてゐる、これから作る人もまづさういふことにするのがよいと思ふ。然し私は口語體を否定はしない、口語でなければ表現出来ないといふやうなものには使つたらよい。

一茶は昔の人だが、口語の句が多い。

雀の子そこのけそこのけお馬が通る 一茶

一茶は俗語を自由に使つたが、それには口語體を使った方が有利な場合が多い、それが一茶の俳句の特徴にもなつてゐる。

約束の寒の土筆を煮て下さい 茅舎

母がいふ落葉で風呂がわきました 有風

茅舎は病弱の人だったが、寒の土筆が食べたくて、かう人に頼んだのだが、そのたのむ心持が口語で、その通り言つたために切實になつてゐる。

有風のはまた、やさしい母親を子供の心で表現したので、やはり口語であるために、その心持がよく出たのである。茅舎はすでに故人になつたが、二人とも現代の俳人である。

山口青邨著『俳句入門』より抜粋